

新元号が「令和」に決まった。今年には天皇に関する事柄に注目が集まっている。ここでも、天皇の即位に関わる資料を紹介する。平成31年4月30日今上天皇譲位、令和元年5月1日新天皇即位と時代が移り、10月22日には即位礼正殿の儀が執り行われる。これは皇位継承の儀式の一つにあたる。まず5月1日は皇位の証である三種の神器を受け継ぐ儀式、続いて即位礼正殿の儀、最後に11月14日と15日の大嘗祭へと進む。即位礼正殿の儀は、そのなかでも内外に即位を宣明する重要なものである。



図1 井上式地歴標本「文官礼服着用模型」  
明治末 高さ24.0cm

で、現在でも冠婚葬祭の服装としてその名称をとどめている。礼服は五位以上の官吏にのみ着用が許され、さらに位階によつて



図2 三彩文官 唐代  
高さ86.2cm

で厳密に規定される。礼服着用時のみかぶる礼冠は、黒の三山冠の周囲に金属製の押蔓をめぐらし、後頭部に櫛形を立てて各種の玉を飾るなどした。当初は新年朝賀や大祓などの祭祀にも用いられたが、平安時代中期になると、天皇が踐祚の後、皇位継承を天下万民に公示する即位式にのみ着用する特別な服装となった。文官は即位の宣命を読む務めがあり、即位式の責任者である内弁の左大臣を補佐する。今年、京都国立博物館で初公開された江戸時代の六曲一双の「れいげん霊元天皇即位・ごさい後西天皇譲位図屏風」にも彼らが描かれていて、同様の服装で新天皇に拝礼する姿は興味深い。しかし、古代以来の

即位式での礼服着用は江戸時代までで、明治天皇の即位礼以降和風の装束が採用されて、これを「御装束」と称するようになった。明治になって唐風儀式撤廃、古式復興が目指された結果である。なるほど唐三彩の文官の装束に重なる(図2)。

古来の即位式を伝えるこの屏風は京狩野第三代狩野永納が描いたと考えられている。霊元天皇は、江戸幕府と朝廷の亀裂を生んだ「しえ紫衣事件」で譲位した後水尾天皇の第十九皇子で、兄の後西天皇から位を譲られた。この時わずか10歳だった新帝は24年間在位の後院政を敷く。当時として78歳の長寿を全うした院は、晩年落飾し法皇となった。これ以降天皇が法皇になることはなく、最後の法皇である。

この標本模型は、奈良時代から江戸時代までの様々な装束を着用した「井上式地歴標本」と呼ばれる素焼彩色人形である。わが国人類学の祖と言える坪井正五郎が、明治末に博多人形師井上清助に作らせた。坪井はまだ知名度の低かった人類学を、人形を活用して大衆に浸透させようと考えていた。製作した井上はそれまで素朴な郷土人形だった素焼人形を、今日の著名な「博多人形」に引き上げた人物で、内国勸業博覧会やパリ万国博覧会に意欲的に作品を出品しては受賞の榮譽を得ている。坪井を通して、『古事類苑』の編纂に参画した関根正直や、国定教科書制度に主要な役割を果たした芳賀矢一も監修を引き受け、学校向け教材として大々的に売り出された。新聞や学術雑誌にも広告宣伝を行い、その記事が掲載されている。東京帝国大学の当代一流の学者たちが手がけ、万国博覧会で受賞歴のある人形師が製作した最高水準の教材である。当時は急激な欧化主義の反動から日本古来の伝統文化保存に

目が向けられた時期でもあった。当館ではこの「文官礼服着用模型」のほか、全34体(図3)を、天理小学校から受贈して保管している。現在、「井上式地歴標本」は、東京大学、金光学園、金光図書館、福岡県立福岡中央高等学校、青森県立弘前中央高等学校

でのみ存在が確認できる貴重な資料となっている。

令和の時代の幕開け、今年10月の即位礼正殿の儀に、新天皇は黄櫨染御袍の装束で臨まれる。また一つ、歴史が刻まれる。

(図はすべて天理参考館蔵品)



図3 井上式地歴標本 全34点